

プログラム・ノート

寺西基之

6月恒例のサントリーホールの“チェンバーミュージック・ガーデン(CMG)”は、サントリーホール館長で名チェリストの堤剛の演奏&企画による「堤剛プロデュース」で幕を開ける。堤剛の活動の広がりや映し出すかのように、この「堤剛プロデュース」は毎年趣向の異なる企画が打ち出されてきたが、今年のプログラムは様々な作曲家の小品を中心とした多彩さが特徴的だ。作曲家の出身国は様々で、それぞれのお国柄が現れた曲が並び、チェロのオリジナル曲もあれば編曲物(いずれも往年の名チェリストによる編曲)もあり、さらに前半をハープ、後半をピアノとのデュオとすることで異なる響きを生み出すことを意図するなど、小品の世界が多様な形で楽しめる内容となっている。日本の誇る名ハープ奏者で、この楽器の表現の可能性を押し広げてきた吉野直子、アンサンブル・ピアニストとして類い稀なセンスを持つ須関裕子というふたりの優れた共演者とともに堤剛が作り出す至福のひと時を味わいたい。

シューベルト：アルペッジョーネ・ソナタ イ短調 D. 821

アルペッジョーネはウィーンのギター製造者シュタウファーが1823年に開発したチェロとギターを掛け合わせたような弦楽器である。フランツ・シューベルト(1797～1828)は1824年にアルペッジョーネ奏者ヴィンツェンツ・シュスターのためにこのソナタを作曲した。楽器そのものは程なく廃れてしまったが、この作品は旋律美の魅力ゆえにチェロやヴィオラによって今日まで演奏され続けてきた。アレグロ・モデラート、アダージョ、アレグレットの3楽章でなり、原曲はピアノとの二重奏だが、今回ピアノ・パートはハープで演奏される。

カザルス：パストラル

スペインが生んだチェロの大巨匠パブロ・カザルス(1876～1973)がまだ17歳だった1893年にチェロとピアノ(今回はハープ)のために書いた小品。主要主題はどこかノスタルジックで、故郷カタルーニャの民俗音楽の性格を感じさせる。中間部は伴奏の細やかな動きを背景にチェロが広がりある旋律を歌う。

グラナドス(カサド 編曲)：オペラ『ゴイエスカス』より 間奏曲

スペイン国民楽派を確立したエンリケ・グラナドス(1867～1916)のオペラ分野での傑作『ゴイエスカス』は、元々ゴヤの絵から靈感を得て作曲したピアノ曲集『ゴイエスカス』をもとに作り上げられた作品。スペイン的な哀感と情熱に満ちたこの間奏曲は特に有名だ。

ドビュッシー (フォーイヤール 編曲)：前奏曲集第1巻 より 第8曲「亜麻色の髪の乙女」

クロード・ドビュッシー (1862～1918)は斬新な音語法で新しい音楽のあり方を求めたフランス近代の作曲家である。ピアノのための2巻の『前奏曲集』は円熟した書法のうちにイメージ豊かな響きを追求した傑作で、「亜麻色の髪の乙女」はこの曲集第1巻 (1909～10)の第8曲にあたる。優しい叙情美に満ちた佳品である。

シューマン：民謡風の5つの小品 作品102

ドイツ・ロマン派を代表するロベルト・シューマン (1810～56)は1849年にピアノと種々の楽器の二重奏による小品集を次々書いた。チェロとピアノのための『民謡風の5つの小品』もそのひとつで、“民謡風”という題のとおり各曲の主題は素朴な曲想になっているが、詩情に満ちた幻想性のうちにロマン的表現が発揮されている点がいかにもシューマンらしい。

ドヴォルジャーク：ロンド ト短調 作品94

ボヘミア国民楽派の作曲家として知られるアントニーン・ドヴォルジャーク (1841～1904)が円熟期の1891年に作曲したチェロとピアノのための曲である。ボヘミアの民俗舞曲風の主題を中心とした粹なロンドで、途中の副主題では情感豊かな旋律も現れる。のちの1893年には自らチェロと管弦楽用に編曲もしている。

ラヴェル (バズレール 編曲)：ハバネラ形式の小品

近代フランスの作曲家モーリス・ラヴェル (1875～1937)が1907年に作曲したこの曲は、題のとおりハバネラ (キューバ起源の舞曲で、スペインで流行)のリズムを特徴とした名品。元々はヴォカリーズ (母音唱法)の練習用歌曲として書かれたが、楽器で演奏されることが多い。

ピアソラ：『ル・グラン・タンゴ』

アストル・ピアソラ (1921～92)はアルゼンチンの作曲家・バンドネオン奏者で、タンゴの歴史に新たな頁を開いた。名チェリストのムスティスラフ・ロストロポーヴィチ (1927～2007)のために1982年に書かれたチェロとピアノのためのこの作品は、タンゴの語法によるリズムと豊かな歌が活かされた生氣と起伏に満ちた名曲である。

(てらにし もとゆき・音楽評論)